

メトピア物語

林 えり子

昭和二十年八月十五日終戦の詔勅が下つたのち三十日に、連合軍の最高司令官マッカーサーは厚木から焼け跡の横浜に着いた。無残な焦土にボツンと残つたホテル・ニューグランドが宿舎だった。ホテル・ニューグランドは横浜市と市民の有力者などで建てられ、昭和十三年からは出資者の一人であった野村洋三が初代土井会長の後をまかされていた。その野村会長がマッカーサーに助惣艦を食へさせて、日本にこんなものしかないとしたのは貴殿だといつた噂が流れ、野村を知る世間はあるようなことだと思ひ、占領軍への糧食をさげたのであったが、真実はちがっていた。ホイットニー將軍はマッカーサー回想記で、丁重なホテルの係員たちにとり囲まれてビフテキの夕食のサービスを受けたと書き、そのときに「マッカーサーのサラをとりあげて、中に毒を仕込んでいないかを確かめたい衝動にかられた」といふ。

敗戦降伏の虚脱状態の日本で、食糧

野村洋三とミチ子

気概

昭和二十年八月十五日終戦の詔勅など調達できる時ではなかった。その中で三浦半島一帯の農民漁民に手配をして困難の食糧集めに当ってビフテキを獲したのは野村の妻、ミチ子であった。

夫婦は横浜で観光客相手に私設外

交官といわれる良心で美術品を商ったサムライ商会の経営者であった。洋三は青年時から欧米に往き来して語学や消息にたけていたし、ミチ子は箱根芦ノ湯「紀伊国屋」旅館の娘でやはり客おしらは幼い頃の

記憶にちどつてい、長じて英和女学校で本格的に英語を学び外人に同等のつきあいができた。サムライ商会は関東大震災で灰燼と化し、再興の見通しがついた頃には大空襲で焼かれ、夫婦は焼け残ったホテルの一室に暮らしていたのである。ミチ子は、マッカーサーの宿舎になるとの命令を受けたとき、サムライ商会が口利きをしたロシア人の商人との牛肉罐詰取引の苦い経験を思い出した。その調達が出来なかったことでミチ子はロシア人に「こんな物のない日本を知っていたら日露戦争はもう少し続けたらよかった」と言われた

のである。同様なことをマッカーサーに言わせたくないの一心と、商人としてのたしなみから、彼女は疎漏のないせいはいっぱいのもてなしをしたのであった。マッカーサーは三階の三二五六、七の三室を使った。野村夫婦は二階の二二〇室にいて、司令部の動静に固唾をのんでいた。洋三は、司令官到着前に打ち合せに来たアイケルバールが中将に占領統治の不安をもち、していたためか、マッカーサー到着の翌日には部屋に呼ばれた。港の見える窓際でマッカーサーは「きれいだ、すばらしい」と眺望をほめ、それから洋三に希望があるならと促した。洋三は、「婦女子の安全を護ってほしい」「栄養失調の日本国民のために軍の食糧をわけてあげてほしい」と述べた。ミチ子もまたマッカーサーに呼ばれて日本人の誰ぞかが贈った羽子板の説明をするのだが、マッカーサーが日本到着後に最初に接した民間の日本人は野村夫婦だったと思われ、白髪胸を張った夫婦に敗戦国でも毒を盛らない国民性と餓死寸前にも生きようとする気概というものを垣間見たであろう。



画 三井 永一

(作家)